



2022
2月

園だより

認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園
山口県下関市彦島塩浜町2丁目2-21 ☎ 083(266)5821

カムカム英語脳

園庭の隅に、スイセンの花が静かに咲いています。わくわく山には、ミツマタの花がつぼみを膨らませています。少しずつ春の訪れの気配が見えると、元気が出てくるものです。新型コロナウイルスも、雪が解けるように感染者の数字が減ってほしいと願うばかりです。

感染拡大区分が最も高いレベル3に引き上げられ、園での生活は昨年夏の状態に戻りました。「英語で遊ぼう」の時間も当面休止です。「英語で遊ぼう」は、もも組とさくら組を対象に、月1回アメリカ出身の男性講師が、チャンツやフラッシュカード、歌などを取り入れて、一緒にネイティブ言語に親しむ、子どもたちがとても楽しみにしている時間です。

幼児期からの英語教育については、昔から賛否両論ありました。「英語よりもまず日本語を正しく教えるべきだ」という反対論に対して、現在では早期からの取組を重視する考えが主流になってきています。小学校でも昨年度から英語が導入され、3・4年生で週1時間、5・6年生はさらに週2時間、しかも必修教科として取り扱うようになりました。

では、早期から英語を取り入れるメリットは何なのでしょう。それは、英語特有の発音を聞き分けられるようになる、つまり「英語耳」が育つからだと言われています。

教育学博士、七田眞氏によると、大人が左脳（主に論理的思考）で英語を理解しようとするのに対し、子どもは右脳（主に感覚）で受け入れるのだそうです。（「子どもの脳は6歳までにゆっくり育てなさい」中経出版）例えば、right (write) / light という言葉を聞いて、大人はなかなか区別できません。でも、子どもは比較的早い段階で聞き分けることができるそうです。これらの単語を片仮名で表記すると全部「ライト」ですが、子どもは大人と違って片仮名では考えません。英語の複雑な発音を、子どもは50音の先入観などなしに、耳だけで感じる右脳で記憶しているのです。

右脳で記憶したものは、ピアニストの絶対音感と同様長く記憶に留まります。そして、学校教育で英語を教科として学んだとき、右脳で記憶していた英語のフレーズが、左脳の言語中枢と結び付き、「英語脳」が育っていくのだそうです。

NHKの連続テレビ小説で今放送されている「カムカムエヴリバディ」、終戦直後にもかかわらずラジオ英語講座が子どもからお年寄りまでラジオに釘付けにしたところからドラマが展開されています。当時英語教育など受けたこともない国民は、ラジオから聞こえてくる英語を、右脳で聴き、楽しんでいたのでしょね。

グローバル社会の現在では、英語で諸外国の相手と互角に渡り合う人材が求められています。今年の大学入学共通テストでは、英語の語数に圧倒されました。速読力のある学生を選抜するねらいなのかもしれません。でも、昔のように古典や時事問題などはなく、ブログや動物園のウェブサイトなど、身近な題材から出題されているため、単語は平易で私のような者でも内容は理解できます。ところが、1問終えるだけで相当時間がかかりました。なぜか。私はいちいち英語を日本語に変換しながら読み進め、日本語で考え、それをまた英語に変換して解答していたからに他なりません。コテコテの日本語脳です。速読力は英語脳で読むことが原則だと痛感しました。大学で一応英語を専攻した意地を見せたかったのですが、毎年、完敗です。（園長 寺本 明生）



幼稚園の電柱広告設置
くわしくは裏面で